

俺、マサラタウンのサトシ！

ミスターXY

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なにか分からずサトシに憑依してしまった名前もない人。前世の名前は明かされないが、サトシとなったからにはポケモンマスターを目指さないと。ということ、ポケモンマスター。狙います

サトシの使うポケモンがもし全く別のポケモンになればと、例えばピカチュウがラッタとか。そんな作品です。サトシっぽくないのは仕方ないことです

なにかおかしい点があれば教えてください

夜中でも気軽に感想をどうぞ。感想待ってます

目次

憑依	1
まずは捕獲、それからな	5
トキワシテイ、しかしジムリーダーは不在	9
虫！虫！虫！圧倒的虫！	12
ジム戦。意地の悪い戦い、略して意地悪	16
ニドラン♂とニドラン♀！仲のいいカップル！	20
おつきみやま、謎の儀式	25
謎のたまご	28
ハナダジム、まさかお前がジムリーダー!?	30
長い道、地下通路は危険？	33
ピツピを守れ、捕まる前に、捕まえよう	36
デイグダの穴、デイグダ以外にも？	39
V S ライチユウ	44
イワヤマトンネル	48
たまごが孵り、知らないポケモンが	52
コイン！スロット！チャージ！	55
リオル、鍛える	59
タマムシジム。脅威のくさタイプ。	64

憑依

「みんな？憑依って知ってるか？誰かにとり憑く事さ、でき…：俺は…：いつの間にか…：マサラタウンのサトシ。所謂ポケモンの主人公に憑依してしまった。俺の何が悪い？」

そう、俺は普通に街を歩いて帰って寝て。という行動をしたただけだ。何も悪くない。仕事帰りだからね!?万引きした訳でも恐喝した訳でも交通ルール…：は…：守ってる。多分、信号無視はしないからな。怖いもん車。で、何も悪くない！俺は悪くねえ！なのに何故俺がサトシに？というか苗字は？

「サトシ。起きてる？」

「あ、うん母さ…：ママ」

確かサトシはママって呼んでたはずだ…：だよな？知識ないから教えてくれる人がいたらと思うがここには知り合いは1人もいない。悲しい出来事だね

「明日、オーキド博士からポケモンを貰うの、誰か決めた？」

「悩んでる」

正直ポケモンなんて初代？あの赤緑青ピカチュウ版のやつしかやったことないから知らん。あ、でもクチートってポケモンは可愛いと思ったよ。ポニーテールで…：じゃない！ポケモンに対する知識がない！金銀ではがねとあくが追加だっけ？最近になるとフェアリーだったっけ？うわあ!?わかんねえことだらけだ！

「どうしたの？」

「誰にするか悩んでる…：」

初代はリザードンがかっこよくて使ってた気がする。あまり覚えてないな。でも竜っぽいじゃん？男心くすぐられるだろ？じゃあ使わない手はないだろというだけで選んだ。さて、どうしようか。あえてゼニガメ選ぶか？いや、ヒトカゲにしよう

「ママ、もう寝るよ。貰うポケモンは決まったし」

「そう？分かったわ。おやすみ」

「おやすみ」

【次の日】

「はあ、寝坊なんてオチはなかったよな…。ヒトカゲ誰かに取られるかな？取られてたらゼニガメにしよう」

鬱だ。毎日が鬱だ。今日も、しかし。俺はめげない。朝になったら元の世界にいるとか思ってた俺が悪い。世の中そんなに甘くない。羊羹並に甘くない。羊羹食べたい。おうどんも食べたい。朝は目玉焼きだったけど、なんの卵使ってるんだろうか

「ここがオーキド邸か」

ついた家は大きな家というか屋敷だった。まあいい。ベルを鳴らすか。ベルを鳴らすと大きな音をたてて家？から人が出てくる。ああ、オーキド博士ってこんな人だったな。慌てて出てくるかと言われたらそうでも無い気がするが

「おお、サトシ」

「おはようございます」

一礼、礼儀として当たり前だね。でもね、社員やってたらこれ普通だから

「おはよう、いや。まさか1番遅く来ると思ってた奴が来るとは…」

「あれ？1番なんですか？それと俺の評価酷くないですか？」

「いや、先に来た子がおるよ。さて、評価の方は置いておいて入るのじゃ」

うーむ、相当サトシという人間は生活習慣は知らんが悪い印象を受けてたらしい。しかし俺は真面目だぞ。多分

「さて、ここに3匹…。いや、2匹のポケモンがおるじゃろ？」

「ボールの中ですけどね」

「そこを言うでない！」

怒られた。俺に非はないのに。つつこんただけなのに。まあいい「こほん。さて、ヒトカゲかゼニガメ。どっちを選ぶ？」

「フシギダネで」

「選択肢にないじゃろ！」

痛い、頭を叩かれた。少しくらい巫山戯てもいいじゃないか。ポケ

モンの世界を満喫したいんだし。さて、フシギダネはなし、まあこれはどうでもいい。ヒトカゲがいたからね

「じゃあヒトカゲで」

「ではボールから出してみなさい」

真ん中のスイッチ、開閉スイッチを押してポンと出てくるヒトカゲ
「カゲ！」

「よし、ヒトカゲ。お前はこれから俺の人生のパートナーだ。よろしくな」

「カゲ！」

「うむ、仲がよくてよい。ではあとはシゲルを待つだけじゃな。」

シゲル、確かサトシのライバルだよな。って、俺がサトシか。待つか？嫌な性格してた気がするが

「それじゃ俺はこれで」

「待て待て！モンスターボールとベルトが必要じゃろ。それにポケモン図鑑に回復スプレーも」

「あ、はい」

ついていけねえ。とりあえず。モンスターボールはポケモンを捕まえるアイテムだよな。ハイパーボールとかマスターボールがあるんだよな。マスターボールが入ったらミュウツーに使おうかな
「どこか変なところありますか？」

「いや、ない。では、ポケモン図鑑完成。頼むぞ」

頼むって言われても…よし。次の目的地は…目的地は…

「目的地は？」

「はあ…やっぱりサトシじゃな」

なんと酷い言い方。しかしこれは俺が悪い。ポケモンの事だけしか考えず先のことを考えてなかったことだ。さて、どうしたものか

「タウンマップをやろう。それで行き先が分かる」

「ありがとうございます！ヒトカゲ、戻れ」

モンスターボールにヒトカゲを戻し腰に付けると走ってオーキド邸を出る

「あ、サトシ！」

「ママ？」

「これ、お昼ご飯作ったから、よかつたらお昼に貰ったポケモンと食べて」

「ありがとう！」

目的地は… トキワシティか

まずは捕獲、それからな

「さて、そろそろポケモンを見たいが」

どこを見ても草原が広がるだけ。しかし一向にポケモンは見つからん

「ん？あれは…」

サツとポケモン図鑑を取り出す。そして開く

「オニスズメ。いそがしく、あちこちを とびまわる。たいりよくは すぐれないが オウムがえしを つかうと てごわい。」

オウムがえし？なんだそれ。とりあえず捕まえるか。ヒトカゲを出してつと

「頼むぞ。ヒトカゲ」

「カゲ！」

ヒトカゲの覚えている技は… ひっかくなきごえか。よし、なきごえで怯ませてその間にひっかくを繰り返して捕まえるか

「なきごえ！」

「カゲ〜！」

「クエ!？」

よし！怯んだ！いきなりで動揺してるな！そのまま畳み掛ける！

「続けてひっかく！」

「カゲ！」

オニスズメにひっかくが当たる。よしダメージを与えたな。このまま捕まえるか

「モンスターボールを… 思いつきり投げていいのか？えい」

あ、痛そう。後で仕返し喰らわないよな？… 捕まったか

「オニスズメゲット。さて、出してつと」

「クエ！クエー！」

「わ、悪い。今度はとうかこれからは思いつきり投げないから」
抗議の声が聞こえた。俺は悪くない気がするが

「さて、じゃあ昼ごはん食うか！」

2匹が集まる。包を開けるとおにぎりが入っていた。あと紙も

「えーつと、サトシへ、頑張つてポケモンと一緒に学んできてね…
か。なんか悪い気もするが。よし、食べるぞー！」

「カゲ！（クエー）」

ヒトカゲとオニスズメと一緒ににおにぎりを食べてると水が欲しく
なつてきた。うーむ、水か。どうするか、とりあえず歩いてどこか水
を飲める場所を探すか

「水… 水… おいしい水つてあつたよな。あれがあればなあ」

苦勞しないのに、まあ文句を言つても仕方ない。まずは水を探すこ
とだ。水分補給は大事だよ。歩いてると川を発見した

「ここから落ちたら大変そうだなあ… ん？女の子？まあいい。水を
飲むか。そうだ。こいつらにも飲ませてやらないとな」

ヒトカゲとオニスズメを出す

「2匹とも、水飲むだろ？」

2匹とも頷く、川に3… 1人と2匹が並んで水を飲む

「ぶはあー！生き返るー！」

生き返るつて言葉先ずおかしいよね。死んでもないのに… 生き
返るほどの… つて意味なんだろうけど、そもそも生き返るほどつて
なに？まあいいや

「下に降りたいけど降りる場所は… なさそう？」

まさかここでロッククライミングをすることになろうとは

「よいつしよ、えつと次こつち」

「ちよつとあんた!?何してるのよ!？」

下から声が、しかし今の俺は真剣なんだ。1歩間違えたら俺は地面
に真つ逆さま、死んでしまう。それだけは嫌だ。一応オニスズメに空
で待機してもらつてるが意味無いだろう。そうだ。ポケモンには進
化があるんだよな。オニスズメの進化つてなんだっけ？そもそも
あつたっけ？

「悪い事は言わないからやめなさい！」

無理、もう戻れない。ゆっくり… ゆっくり。

「おわっ!？」

「きゃっ!？」

大丈夫！まだ終わらんよ！俺はなんとか右腕のみで耐える。一瞬落ちたかと思つたよ。しかし右腕が耐えられても持つてる岩が耐えられない

「あ」

俺の人生終わった。さようなら俺のポケモンライフ

「… ってあれ？」

「くエエエエ！」

オニスズメ… お前… なんとかオニスズメが他のオニスズメを呼んでくれて俺を大量のオニスズメにより支えてくれている。痛いけど

「助かったよオニスズメ」

「クエ！」

「心臓が止まるかと思つたじゃない！」

「えーっと、君は？」

「レディに対してなつてない質問ね」

「俺はマサラタウンのサトシ。で、君は？」

「カスミよ」

「そうか、カスミ。俺の心配してくれてありがとう」

「礼なんていいわよ。私は何もできなかつたし」

でも俺に対して何か思ってくれたのは確か、礼は言わないと

「それでもだよ。ありがとう」

「ふん… マサラタウンってオーキド博士のところから出てきた新米トレーナー？」

「まあそうなるかな」

新米なのか？一応ポケモン経験ありだし… いや、リアルと空想を一緒にしてはダメだな。今はリアル、本物だ。

「それで、君は何を？」

「釣りよ。釣り、水ポケモンが好きなの」

へえ、水タイプは俺の手持ちにはいない。欲しいな。あ、思い出した。コイキングがギャラドスに進化するんだ。

「貴方、無謀なのね」

「無茶はしたと思う。でも下がる道が無かったから」

「あっちの方から下に降れるわよ」

ええ… マジかよ。過ぎたことを気にしても仕方ないな。じゃあ俺は先に進むか。おっとその前に

「オニスズメたち、ありがとう」

「クエー!!!」

大量のオニスズメが飛んでどこかへ飛び去っていく。さて、行くか「貴方、ジム戦するの？」

「ん？」

そういや考えてなかったな。ジム戦はポケモンマスターになるには必要な事だよな。じゃあやるか

「ああ」

「そう… 私もついて行くわ」

「は？」

1人目の仲間ができた。

トキワシテイ、しかしジムリーダーは不在

「自分だけ自転車、ズルくないか？」

「いいでしょ。私の物なんだから」

まあそうだけど。さて、オニスズメに方角を教えてもらい進んでいる。オニスズメは真っ直ぐ前を飛んでいる。という事は町はこの先か、夜になる前にどこかマシな場所にいたいな

「オニスズメなんて捕まえてるんだ。やつぱりオーキド博士から頼まれてポケモン図鑑つてのを完成させるのが目的？」

「んー、そうっっちゃそうかな。カスミはなんであそこで釣りを？」

「ぬしがいるって聞いて釣りをしてたの。とんだデマだったけど」

ふーん、案外あーゆう水辺に強いポケモンいそうだけど。水ポケモンいいなあ。どこかで手に入らないかな

「もうすぐトキワシテイよ」

お、見えた見えた。あれがトキワシテイか。広いな。マサラタウンより……いや敷地的に言えばマサラタウンの方が広いか？

「ポケモンセンターでポケモンを回復つと」

「新米なのによく覚えてるわね」

「基本だろ？」

「じゃあ知ってる？ポケモンセンターではトレーナーのための泊まれる施設があるって」

いいい!?そんなのあんのか!?というか無料?無料ですか？

「もちろん無料よ」

タダと聞いて安いものはない。と言うがまさかそんな都合の良いものがあるとは。世間は広いな

「知らないみたいね」

「ああ、今初めて知ったよ。ありがとう。で、カスミは?ベテラントレーナーなのか?」

「え?まあ……ね」

なにか訳ありなのか?まあいい。早速ポケモンセンターに行こう
「うーん」

ポケモンは渡してきた。あとは… オーキド博士に報告かな。でも、ママにも報告しとかないとな。

「えっと家電家電」

確かこの番号だったはず

「はい、あらサトシ」

「ママ、今トキワシテイに着いたよ」

「嘘!? もうそんなに行ったの? すごいじゃない!」

そんなにすごいことなのか? まあいい

「じゃあ俺は元気だしオーキド博士に報告しないとだから」

「ええ、分かったわ。それじゃあね」

切ってつと

「オーキド博士?」

「おお!? サトシか! そこはトキワシテイのポケモンセンターじゃな! やるのう」

「あはは、ちよつと派手な冒険しましたけど」

「何があつたかは知らんがポケモンはどれくらい捕まえた?」

「1匹、オニスズメです」

「オニスズメか、オウムがえしを上手く使えれば強いぞ。そうか、もうポケモンを… これは原石か?」

原石? なんのことだろう。どうでもいいから話を切ろうかな

「それじゃオーキド博士、ここで失礼します」

「あー、待ってくれ! 捕まえてほしいポケモンがおるんじや。そのポケモンを捕まえたらこっちに送ってほしい」

「そのポケモンとは?」

「ピッピじや、おつきみやまにおるそうじや」

ピッピ、確かピカチュウと相棒の位置を取り合つたというポケモンだな。それくらいならいいかな。見つけたら程度で

「見つけたらゲット、試みます」

「うむ、ではな」

「お話終わった?」

「ああ、終わったよ。明日ジム戦でもしてみようかな」

「残念ね」

何かと聞く前に俺に

「このジムリーダーはいないの」

「なんで？」

なにか不在の理由があるはず。それを聞いたら

「さあ？」

という惚けた感じの言葉。嘘か？

「まあ行ってみたら分かると思うけどいいいわよ。」

そうか、本当に残念だな。どうするか

「次のジムはニビジムよ。でも貴方の手持ち、ヒトカゲとオニスズメでしょ？さつきボールみたから分かるわよ」

「それがなにか？」

「ニビジムはいわタイプを使い手タケシって言う男が担ってるジムなの、いわ。わかる？」

「タイプ相性最悪……か」

確かにいわ相手だとはのおタイプのヒトカゲとひこうタイプのオニスズメは相手にならないな。いや、ヒトカゲはほのお技を覚えてやけどを狙えば或いは

「どうしたの？」

「なにかいい案を考えてる」

「そ、あたしはその様子を見させてもらうわ」

どうする？この辺でみずタイプのポケモンを捕まえるのもありだがあるのか？その辺にいるのはコイキングぐらい。レベルはかなり上げないと進化しない。じゃあ……そうだ！あのポケモンを捕まえたら！

虫！虫！虫！圧倒的虫！

「さて、行くか」

朝早く起きて用意をしている。寝ているヒトカゲたちはボールに戻してリュックを背負う

「ふあ… ちょ!?!どこに行くのよ!?!」

「トキワの森だけど?」

「待ちなさいよ!昨日一緒に行くって言ったでしょ!?!」

「俺の旅なんだから自由だろ」

「仲間意識が無いわけ!?!とりあえず待つてなさい!今用意してくるか
ら!」

はあ、朝から疲れる。しかしカスミは俺にどうしても着いてきたい
ようだ。なにか理由でもあるのだろうか

「… まだかな」

「もういいわよ… ってあれ?」

「遅い、30分経ってる」

準備運動をしていると後ろから声をかけられる。一体何をしていたんだ?

「レディの準備には時間がかかるの」

「あ、そう。じゃあ行くぞ」

「どこに?ジムは」

「ポケモン捕獲」

「ああ、オーキド博士に頼まれてるポケモン図鑑完成ね」

「いや、主目的はそっちじゃない。目的はトキワの森だ」

「げ… トキワの森越えるのよね?」

「越えない。欲しいポケモンがいる」

「嘘… はあ…」

なんでため息をついているのだろうか。どうでもいいか。さて、行くか

「うん… と、場所はこっちか」

歩いて進んで行く。方角は北、真っ直ぐ歩いて行くと森に入る

「もうトキワの森か？」

「早くでましようよ……」

「ビードルを見つける。悪くないが……」

「用事があるって言っただろ。嫌なら帰れ」

「今度はトランセル。うーん、欲しいポケモンじゃないんだけどなあ

「他の言い方無いわけ!？」

「しっ……」

「なにかの音が聞こえる。羽ばたき、しかもそれは翼の音じゃなく、

羽の、虫の羽の音

「……チツ、目的のポケモンじゃないな」

「バタフリー？」

「いや、悪くないか。確かどくのこなとか使えたよな。捕まえるか。

候補としては悪くない。だが攻撃もできて状態異常にできるあのポ

ケモンが欲しい

「ヒトカゲ！」

「カゲ！」

「なきごえで威嚇しろ！」

「カゲ〜！」

「フリー!？」

「ひっかく2発!」

「みだれひっかきになってるとか聞かない。よし2発入ったな。ま

だちよつと必要かな？」

「飛んでひっかく!」

「カゲエ！」

「よし!クリーンヒット!今だなボールを投げるなら

「モンスターボール!」

「当たった……。捕まったな……」

「バタフリー、出てきてくれ」

「フリー……」

「少し弱ってるな。無理もないか。さつきあれだけ痛めつけられたんだから」

「悪いな。キズぐすりだ」

キズの部分にスプレーをかける

「へ、へえ、ポケモンへの配慮も怠ってないんだ」

「当たり前だろ、ポケモンは生きてく以上の相棒なんだから。大丈夫か?」

「フリー!」

「よし!このまま目的のポケモン捕まえるぞ!」

「ちよ、ちよつと、虫ポケモンはいわタイプに相性が」

「分かってるよ。でも相性なんてただの壁だ。目的は状態異常さ」

「状態異常?って言うほどく状態とかまひ状態とか?」

頷く、バタフリーの頭を撫でてやる。気持ちよさそうだ

「さて、バタフリー。虫ポケモンがいっぱいいる場所分かるか?」

「フリー!」

飛んで行った。よし。ついて行こう

「まっ、待ってよ!」

後ろの虫が苦手そうな人は置いておいて走って森を駆け抜ける。すると虫が寄り付きそうな蜜のある木に辿り着いた

「すごい...」

神秘的だ。さて、目的のポケモンは... いた

「ヒトカゲ!あのポケモンにひのこだ!」

さっきの戦いで覚えたのかポケモン図鑑に技が出てる。相当なダメージを期待できる

「スピ!」

「バタフリーに交代!しびれごな!」

「フリ」

バタフリーがスピアーの上を飛んで羽から粉が出てる。それがスピアーに当たり動きを止めた

「モンスターボール!」

1、2、

「ダメか!体力の問題か?ヒトカゲ!ひっかく!」

「カゲ!」

「スピ！」

「まずい！避ける！」

「カゲ！」

ヒトカゲはひっかくを当てるも相手のどくばりを受けてしまう。
そして

「ヒトカゲ！大丈夫か？」

「か、カゲ……」

もうヒトカゲで戦うのは無理そうだな。じゃあバタフリーに任せ
るか

「バタフリーが覚えてる技は……よし、いとをはく！」

バタフリーの口から出た糸でスピアーは動けなくなる

「もう一度！モンスターボール！」

これで捕まらなかったらあとがない！

「……捕まっ……た？」

グツと拳を引き締め飛び跳ねる

「やったぜ！ヒトカゲ！バタフリー！ありがとう！」

「カゲ！」

「フリー！」

よし、スピアーの入ったモンスターボールを取って……羽の音？

「……えっと……お仲間を1匹いただきました……悪かったですよ
か？」

「スピ」

「スピ」

「スピスピ」

うわあ!?あれで突かれたら死ぬぞ!?ポケモンで死人が出るとか
シャレにならないって!みんなをボールに戻して逃げる

「うわああああ！」

「ちよっと!どこに……きゃあああ！」

1日スピアーに追いかけて回されてトキワシティに戻った

ジム戦。意地の悪い戦い、略して意地悪

「さて、ニビシテイだな」

「さてじゃないわよ！昨日の謝罪がまだよ！」

うるさいなあ、着いてきた自分のせいじゃないか。俺も疲れたんだ
しいいだろうに

「さて！ジムに行くか！」

手持ちも万全、行くつきやない！

「頼もう！」

「挑戦者か」

お、貫禄ある人が出てきた。ジムトレーナーか？ジムリーダーか？

「俺はジムリーダーのタケシ！いわタイプを得意としている！来たからには全力で挑ませてもらう！」

「もちー！」

バトルフィールドに立って向かい合う

「お互い使用ポケモンは2匹。どちらかが2匹とも戦闘不能になれば
ジム戦は終了だ。いいな？」

「ああ」

「いけ！「スピアー！」イシツブテ！」

「スピアーのどくでゴリ押しだなんて無理がありすぎるわよ…。」

「スピアー！どくばり！」

「イシツブテ！たいあたり！」

スピアーはイシツブテのたいあたりを避けてその間にどくばりを
打った。予め言っておいた。相手の攻撃を避けてその瞬間に攻撃し
ると

「そのままどくばり連打だ！」

いつかどく状態になるはず

「くっ！素早いな！なら！戻れイシツブテ！いけ！イワーク！」

デカイ、圧倒的デカさ。だがそれでやられる俺じゃない

「どくばり！」

「がまん！」

っ！攻撃せざるおえないか。いや、補助技が…

「いとをはく？」

「スピ？スピ！」

目的と違う技を叫んだためスピアーは一瞬止まった

「解放！」

「耐えろ！スピアー！」

くっ！効くな！だけど、スピアーの体力ゲージはまだ緑、大丈夫なゾーンだ

「どくばり！」

「がまん！」

またかよ！

「いとをはく！」

「解放！」

「どくばり！」

「がまん！」

「いとをはく！」

「解放！」

「何この戦い」

「カゲ…」

2人… ええい2人は呆れてるよ。しかしこの戦いしか俺には残されてないからな。シャーなしだよ。そら！どく状態になっただろ

「どくばり！」

「がまん！」

「そのままどくばりだ！」

「なに!？」

「まだどくばり！」

「解放！」

「スピ!？」

緑ゲージから一気に赤に、がまんは相当強いな。だがこのまま行けば

「イワーク!？」

「毒なんだ。相当ダメージ溜まってたな」

「くっ！イシツブテ！」

「そっちも毒ってるよ！どくばり！」

「スピ！」

「たいあたり！」

「スピーアー!?!」

スピーアーがスピードで負けた。恐らくダメージによりスピードが低下していたのだろう

「よくやってくれたよ。ありがとう、休んでくれ」

ボールに戻して次のボールを投げる

「オニスズメ！あとは任せた！」

「クエ！」

「イシツブテ！くっ！ダメージが」

「トドメ行くぞ！かぜおこし！」

「くエエエ！」

「ツブ…テ」

「くっ！俺の負けだ。まさか苦手タイプで負けるとは」

「よし！勝った！」

「まさか本当に勝つなんて…ある意味天才かも」

「カゲ？」

観客席からのカスミの声は届かないがなにか言ってるのは分かる。悪口とかじゃないだろうか？

「これを渡そう」

「あ、はい」

キラんと光るバツジ

「グレーバツジだ」

「グレーバツジ！GETだぜ！」

「クエ！」

「次はハナダジムだな…まあ頑張りましたまえ」

何かあるのか籠ったがまあいい。よし、次のハナダジムは…おつきみやまを越えた先か。ちょうどいい。そのついでにピツピを捕ま

えればいいだろう

「カスミ！行くぞ！ヒトカゲ！今ので何か学べたか？」

「カゲ！」

「おーそうか、なに言ってるかわからんが学んだならいい。カスミ、置いてくぞ」

「ちよつと待ちなさいよ！」

「面白い戦い方をする子だ」

ニドラン♂とニドラン♀！仲のいいカップル！

「モンスターボール買った方がいいか。よし行こう」

「あんた本当に自分勝手ね」

「ヒトカゲ、歩くか？」

「カゲ！」

手をあげておー！とやってるからには歩くと言ってるのだろう。

よし歩くか

「勝負だ！」

「は？」

「え？ポケモントレーナー同士目が合ったら勝負だろ？」

「そうなの？」

「いいえ、別に受ける必要はないけど…受けなかったら相手に失礼ね」

トホホ、まあ経験値が美味しいいか

「ヒトカゲ！頼むぜ」

「行けビードル！」

「ひのこ！」

「カゲ！」

「ビードル!？」

目に見えたことだろう。どう考えてもビードルがヒトカゲに勝てると思うか？

「ええい、行けコクーン！」

お、進化態、何を繰り出してくる？

「かたくなる！」

「…」

「かたくなる！」

「… ヒトカゲ、ひのこ」

「カゲ！」

燃やし尽くした。コクーンは倒れ目を回している
「嘘だろ!？」

だから目に見えた状況だろ。何か別のやつと戦いたいな

「くっそー！覚えてろ！」

「見事な程の捨て台詞。さて進むか」

「容赦ないわね」

おつきみやまには用事があるからな。ピツピ捕獲のために行かないと行けないし

「ん？」

「あれはニドラン？」

♂と♀が一緒だ。カップルか？

♂「ニド！ニドニド！」

「お！やるか？ヒトカゲ！ひのこー！」

ヒトカゲのひのこが当たるがダメージを受けてない様子

「レベルが高いな…レベルは…12か、今のヒトカゲよりひとつ高いな。よし、なら戻れヒトカゲ！そして行けバタフリー！ねんりきだ！」

こうかはばつぐんだ！よし！いいダメージ入った！モンスターボールを投げるなら今だな

「モンスターボール…!？」

ニドラン♂を捕まえようとしたらニドラン♀が庇った

「いい!？」

♀「ニド！ニドニド！」

「ズルいだろう…どうすんの？これ一発ニドラン♂に当たったら確実に倒すだろ…よしこうなったら」

近づくと、そして

「なあ、お前たち。俺と一緒にこないか？」

♀「ニドっ！」

「俺と一緒に強くなってジム戦をするんだ。戦いだ。お前たちが望んでるか知らないがジム戦はすごいぞ、なんたって相手は歴戦のジムリーダーだからな。どうだ？一緒にこないか？」

♂「ニド、ニドニド」

♀「ニドニド！」

「交渉成立だな、よしモンスターボールに入って…っ!?地震!」

「なんだ?何が起きてる?山の上から何かが転がってきて!?あ!ニドラン♀が危ない!」

「この!」

「なんとか助けることに成功する

「ふう、大丈夫か?」

♀「ニド…」

「気にすんな、これくらいのキズ舐めてたら治る」

肩にかすり傷が

「相手は…」

「ゴローニャ。がんばんのような かわいい カラで おおわれている。1ねんに 1かい だっぴして おおきくなる。」

捕まえたいが余裕がない。何より表示されてるレベルが30とデカイ。今の俺の手持ちで戦えるレベルじゃない

「バタフリー!しびれごな!」

「フリー!」

「ゴロ!」

よし!まひった!これなら…

「ニドラン!2匹ともかくとう技、覚えてないか?」

♂「ニド?...ニド!」

何か話し合っている。ダメか?

♀「ニド!」

走っていった。まさか倒すのか?

♂「ニド!」

♀「ニド!」

にどげりか、確かにダメージは期待できるな。でも

「ゴローニャアア!!」

♀「ニド!」

♂「ニド!」

「ニドラン!」

ニドラン♂がごろがるをまともに受けた。ダメか... 万事休す

か…

「私が出る幕ないじゃない…ゴローニヤなら私の水ポケモンでなんとかなるんだけど…ここはあいつの腕の見せ所ね」

「くそー」

負けか？目の前が真っ白になるのか？

♂「ニドオオオオ!!」

「ニドラン♂が光って!?!」

「進化よ!」

「進化!?あれが!?!」

「ニドリーノ!」

基礎ステータスも上がってるー!これなら!

「ニドリーノ!俺の言うことを聞いてくれるなら!にどげりだ!」

「ニドー!」

飛び上がりジャンプ蹴りがかまされる。それも2発、ゴローニヤは戦闘不能になり転がる

「よっしゃ!レベル30のゴローニヤ倒したぜ!」

「ニドー!」

♀「ニドー!」

おお、おお、仲のいいことで

「仲間になってくれるか?」

「ニドー!」

モンスターボールを叩き落とされた。そして開閉スイッチを押した。ニドラン♀もだ

「お前ら…」

2匹とも捕まった。いや、仲間になった。これでヒトカゲ、オニスズメ、バタフリー、スピアー、ニドリーノ、ニドラン♀と6体揃った。時たまパーティーメンバー変えて行く感じかな

「ニドリーノ&ニドラン♀GETだぜ!」

「カゲカゲ!」

「フリー!」

「やるわね」

「まあな。これでみんなのレベルも上がったしな」
よし、あとはおつきみやまのピツピだな

ヒトカゲLv11 ひかえめ

オニスズメLv12 ゆうかん

バタフリーLv13 のうてんき

スピアールLv13 いじつぱり

ニドリーノLv16 やんちや

ニドラン♀Lv9 れいせい

おつきみやま、謎の儀式

「おつきみやまねえ。正直ピッピ見つける自信ないんだけど」

「ま、頑張りなさい」

他人事だと思つて、まあ他人事だけど

「お、あれは…ズバツトか。でもひこうタイプいるんだよなあ。どくも」

ボツとして無視することに

「ピッピ、ピッピ」

「そう考えてると見つからないわよ」

「そうだよなあ…あれ、なんか光ってる石発見。なんかの石か？」

三日月のマークがあるな。これつてもしかして

「ちよつとちよつと！」

「なんだよ」

「あれ！あれ！」

指さす方向を見るとピンク色の何かが歩いている

「ピッピ?…凶鑑でもピッピって認識してるな。よし捕まえよう」

「待つて、何か変よ。少し隠れて追いかけましょう」

ええ、捕獲あるのみじゃ。まあいいや。捕まえるのはあとにしてあとを追うか

「どこに行くつもりなんだ？」

「さあ？」

さあつて、追うつて言ったのお前だろうに。明るいところに出たな

「もう夜か」

「月の光…見て！」

「ピッピが儀式を行ってます。凶鑑の映像記録機能を使おう」

ピッピの様子を余すことなく撮る。すると

「ピッピ!？」

「誰だ!？」

「俺たちを知らないか？ロケット団だよ。」

「ロケット団！密猟者ね！あたしが成敗してくれるわ！いつて！ス

「スターミー！」

スターミーね、サイコネシスも使えて強い記憶がある

「ヒトカゲ！」

こっちも負けずとポケモンを出す

「はははっ！わざわざポケモンを差し出すか！」

「誰が！バブルこうせん！」

「ひのこ！」

「ドガス！えんまく！」

「コラッタ！今のうちにスターミーの方にひっさつまえば！」

「っ！」

まずい！スターミーが怯んだ！これじゃスターミーに頼った戦い
ができない。こうなったら2体目のポケモンを出して

「待ちなさい、ポケモントレーナーとして一体一なんだから正々堂々
勝負しないとダメよ」

「でも！」

「いいから、スタちゃん、サイコネシス！」

「ドガス！」

すげえ、ドガスを一撃…。もしかしてカスミってやる？

「さっさとコラッタをやっつけるわよ」

「ああ！ヒトカゲ！ひのこ！」

「くっ！炎が」

「スタちゃん、バブルこうせん！」

「コラッタ！くっ！撤退だ！」

なんとかなったな。これでピツピの謎の儀式を続けられる

「ピツピ！」

「俺？」

手を引かれて連れていかれる。ドナドナ…。んん、何を？

「ピツピ！」

「あ、どうも」

さっきと同じ石を貰う。もしかして貴重品？

「ピツピ！」

「あ！ちよつと待つて！誰か俺にゲットされてくれない？オーキド博士が生態を調べたいって、ダメなのは分かつてるけど」

「ピッピ！」

「え？いいのか？」

（・ω・） bと親指を立てて俺に手を差し出す

「じゃあ、このモンスターボールに入ってくれ」

「ピッピ！」

1匹のピッピがモンスターボールに入る。そして捕まる

「こいつはオーキド博士に転送と」

送れたかな？さて、迷路から出るか。途中化石マニアを倒してこうらのカセキを手に入れた

謎のたまご

「ふう、やっと抜けた」

「寝てないから疲れたわ」

こつちだつて寝てないってば。まあ仕方ないっちゃ仕方ないけどね。だつて寝ようとしてもズバツトとかパラスが邪魔するんだもん

「おお！町が見える！」

「ハナダシティよ」

「行くか」

「私を無視するのやめてよね!?!」

さて、ここまで来たんだからジム戦だな。その前に一眠りしたい。てか寝たい

「私は家があるから」

「あ、そう。それじゃあこつからは別行動なわけだ」

「そうね、貴方との旅も楽しかったわよ」

そうか、楽しい要素幾つあった？スピアーに追いかけられたこととか？苦い思い出だな

「ポケモンセンターについたー！よし回復だな」

回復してもらつてオーキド博士にかけた

「んおお！サトシか！ピッピの捕獲ありがとう！」

「いえ、頼まれた事ですし」

「ピッピは何か夜な夜な儀式をするみたいじゃ。実に興味深い」

そうなんだ、あれ、実際見たけど怖い踊りだったな。俺もその中に入れられたけど

「それとニドリーノとニドラン♀を捕まえました。あとバタフリーにスパアー」

「そんなに捕まえたのか！シゲルを超えとるのう」

へえ、シゲルより先に行つてるのか。まあ良好かな。

「特にニドリーノは進化したら」

あ、話長いやつだこれ。こういう時は

「俺用事あるんでそろそろ」

「む？そうか？ではまた」

「はいまた」

よし、切り抜けた。あとは、そうだな。宿を借りるのか

「ジョーイさん、宿借りていいですか？」

「いいですよ。それとポケモンの回復、済みましたよ」

「ありがとうございます」

受け取って宿に入る

「ふう！…こうしてると憑依したって実感湧かないよな…どうせだし楽しもう」

ジム戦の前にちよつと町の探索でもするかな

「ちよつと旅の方」

「はい？」

声をかけられた。一体なんだろう

「たまご貰ってくれんか？お主ならこのたまごを孵化させられるかもしれん」

「はあ、…なんのたまごですか？」

「聞いて驚くなよ？ポケモンのたまごじゃよ。えつと…シンオウじゃったかな？の地方から頼まれたポケモンのたまごなんじゃが」

「いいですよ。あ、でも手持ち1匹誰か送らないと…バタフリーでいいか。今までありがとう。また力貸してくれよな」

モンスターボールの中で領いた気がした

「えつとこれですね」

「そうじゃ。割るんじゃないぞ？」

「ははは、そんなことするわけないじゃないですか。それじゃ」

町の探索は終わったな。あとは…ジム戦か。それは明日するとして今日はゆつくり休むか

ハナダジム、まさかお前がジムリーダー!?

「さて、今日はジム戦の日だな。相手は水タイプのポケモンを使うって言うってたな。町の噂によると、本当かどうかわからないが。まあ頑張るか。手持ちはオニスズメと…スピアーか、テンプレだな。悪いなヒトカゲ、今回も出番はないよ」

「カゲー!」

大丈夫と、言ってくれてるのかな。さて、行くか

「頼もう!」

「待ってたわよ」

「カスミ?…ジムリーダーは?」

「あたしよ」

「へえ…ええ!?!」

「黙っててごめんね。ゴローニヤの時も手助けできたんだけどトレーナーとしての素質を探るためにね」

嘘だろ!?!あの虫嫌いなカスミがジムリーダー!?!人は見かけによらぬものと言うがまさかなあ

「なるほど、スターミーが主力なわけだ」

「情報アドバンテージはあるけど大した事ないわ。さ、始めましょう。今回も2対2でいいわね?」

「あ、ああ」

いきなり貫禄ある姿になるとこれまでの態度が悪いように思えてくる。さて、どうするか、

「行け!オニスズメ!」

「ふーん、てつきり1番レベルの高いニドリーノで来るかと思ったけどタイプ相性考えてるのね。いつてスターミー!」

さて、どうなる?

「素早さでは負けてるか?いや、こうそくいどう!」

「なるほど、素早さをあげる作戦ね。でも!サイコキネシス!」

耐えてくれ!頼む!

「クエー!」

「よし！かぜおこし！」

「くっ！スタちゃん！サイコキネシス！」

「大きく旋回して躲せ！」

ねんりきの範囲内から出て遠くに行く

「へえ、やるわね。でもこれはどう？みずのはどう！」

「一か八か！みだれづき！」

みずのはどうを乗り越えてスターミーに近づくと、これでサイコキネシスの範囲内だ。5回当たってくれ！

「っ！スタちゃんが倒れた!？」

もしかしてきゆうしよに当たったのか？それならラッキーだが

「まさかオニスズメにやられるなんてね。戻ってスタちゃん。きゆうしよに当たったのかしら？でも次があるわ！行って！ヒトデマン！」

「オニスズメはもう戦闘不能寸前、なら

「みずのはどう！」

「耐えろ！」

赤ゲージ…ギリギリ止まった！

「オウムがえし！」

みずのはどうが発動する。これで

「こんらんした!？」

みずのはどうの追加効果が発動したようだ。よし、このまま畳み掛ける！

「みだれづき！」

「そうなんでもやられるもんですか！みずのはどう！」

っ！放たれた！そのみずのはどうはオニスズメに当たる

「オニスズメ、休んでくれ…ふう、行け！スピアー！」

「なんだ、この間と同じメンツなんだ」

「でもこれで互いに同じ条件、どうやったってこれが最後だ」

「みずのはどう！」

「ダブルニードル！」

「嘘!?私が出た時はそんなの覚えてなかった」

「レベル上げてして修行を積んだのさ。さあかましてやれ！」
「スピー！」

スピーアの2つの棘がヒトデマンに刺さる

「よっしゃあ！俺の勝ち！」

「新米トレーナーに負けた…！」

何か酷く落ち込んでるようだがこれも勝負。勝ったからには俺にバツジを貰わないと

「よくっ、やるっ、わね！はい。これがブルーバツジよ。」

飛んで俺のところまでやってくる。よし！ゲット！

「あたしは貴方の旅についてくわ」

「え？でもジムを留守にしたら」

「お姉ちゃんたちがなんとかするわよ。それじゃ行くわよ！」

ええ…

たまご

ヒトカゲLv18

オニスズメLv20

スピーアLv21

ニドリーノLv25

ニドラン♀Lv15

長い道、地下通路は危険？

「えっと次は… ヤマブキシテイだな。このゲートを通ればいいのか」

「もうヤマブキシテイ？レベル高いわよ？」

「いいのいいの、行けるところに先に行くのが1番」

「あ、君たち。今ここは通行止めだから」

「へ？」

通行止め、つまり通ってはダメということ。

「はあ… どうやって次の町に行くんだよ…」

「じゃあ地下通路ね。」

「地下通路？」

なんだそれは、そんな便利なところがあるのか？

「こつちよ」

初めてカスミが役にたった気がする

「へえ、こんなところあったのか」

「さ、行きましょう」

中に入ると… 暗い

「あんまり前が見えないんだが」

「… 地下通路だもの」

ライトとかないの？リュックの中にはなかったな

「… おわつと!？」

何かを蹴った。なんだろう

「キズぐすり？」

「ああ、地下通路は落し物が多いそうよ」

なんだか悪い気持ちになるな。ま、いいか。これも何かの縁だ。リュックに入れてと

「しかし長いな」

「だってクチバシテイまで続いているもの、長いに決まってるじゃない」
夜になってないといいいけどなあ

「ん？何か言ったかカスミ」

「だからクチバシテイまで続いてるって」

「いや、それ以外で」

「言ってるけど……？」

あれ？俺の聞き間違い？それとも幻聴？

「ゴース……」

「うわ!？」

ポケモン!?えっと

「ゴース うすい ガスじょうの せいめいたい。ガスに つつま
れると インドぞうも 2びょうで たおれる。」

危ない生き物だなあ。さて、どうするか。捕まえるか？

「行け!ヒトカゲ!」

「カゲ!」

「ひのこ!」

「馬鹿!」

ん?何が馬鹿なんだ?

「へ?」

爆発した。そういやガスって言ってたな。爆発するわな

「痛てて…… カスミ!大丈夫か!?!ヒトカゲも!」

「カゲ……」

ヒトカゲがげっそりだ。悪いことをしたな。ボールに戻してやる
か

「悪いな、戻ってくれ」

ボールに戻す。カスミを探してキョロキョロしていると

「あんたねえ…… 地下通路壊してどうするのよ」

声が聞こえる。声のする方を見るとカスミがいる

「いやあ…… ごめんとしか言いようがないわ」

壊れてしまった…… まあまだ通れるし大丈夫だろ

「さ、行こう。ゴースが来ない内に」

「ポジティブねえ、まあいいわ。確かにそうだし」

逃げろ、逃げろ

「お、光が見える」

「ゴールね」

「ふう、光って素晴らしい」

大きく手をあげて腕を広げる。今日は大変な1日だったな。

「新しいポケモン捕まえられるかな？」

「まあこれまでよりは新しいポケモンがいるのは確かだね」

よし、捕獲を目指して頑張ろう

ピッピを守れ、捕まる前に、捕まえよう

「ふう、ここがクチバシテイか」

「ええ、港町ね」

潮風がくるな。たしかに港町と言うだけある。船が沢山だ。これに乗ってどこかに旅ができるかもだな

「やめろ！ワシの大切なピッピちゃんに手を出すな！」

「カスミ！」

「ええ！スターミー！」

「ヒトカゲ！ひのこ！」

「サイコキネシス！」

よし、なんとか撃退できたけど、誰だったんだろうか。足下に攻撃させただけだし無事だろうが…

「おお！ありがとう！ワシのピッピちゃんを助けてくれて！」

「いえ、トレーナーとして当たり前のことをしただけです」

しかしピッピが狙われてたということは何か密猟者とか？

「じゃが次に何をしてくるか…」

んー、そうだ

「ピッピを強くしましょうよ」

「え？でもどうやって」

「俺達が相手しますよ、強いですよ。俺達。じゃ、早速やろう」

ポケモンセンターで回復してもらってすぐにバトルフィールドに
来た

「行きますよー」

「ワシ、トレーナーとかじゃないからよくわからんのじゃが」

「指示出せばいいだけです。いけ！ヒトカゲ！」

「カゲ！」

「バトル馬鹿って言うか…」

「ひのこ！」

「わわわ！ピッピちゃん！やってくれ！」

「？」

ん？何か変だ

「ヒトカゲ、ストップ！」

「カゲ！」

ひのこがあらぬ方向へ飛んでいく。それはカスミの方へ

「はあ!?なんでこつちななのよ!?スタちゃん、お願い」

ハイドロポンプで炎を消したか

「もしかして... トレーナーじゃないんですか?ピツピの」

「え?それって」

「そうじゃ... このピツピちゃんは野生のピツピなんじゃ」

ほえ、まさかとは思ったがまさかだったか

「んー、困ったな。野生となると言うこと聞いてくれない... 捕まえるのも...」

「あの一お主にこのピツピちゃんを預かってほしい!お主ならきつといい環境で育てられると」

はあ。そうは言われてもピツピはもう捕まえてるし...

「カスミ、ゲットしたら?可愛いだろ?」

「ええ!?私!... 水ポケモンじゃないし」

そこで渋る?普通、可愛い可愛くないで決めるのが女の子じゃ?

「やっぱり爺さんがゲットした方がいいですよ。」

「じゃが」

あーもう。じれったい

「いいから、このピツピだって爺さんにゲットされたいはず。仲のいい人なんだから」

「... わかった。モンスターボールをくれんか?」

それくらいなら。ボールを渡す

「...」

「?」

「とうー!」

「ピツ!?!」

転がっていく。そして止まる

「いざという時はモンスターボールに戻してしまえば連れていかれる

事はないんですし。大丈夫ですよ。それじゃあ俺はこれで。ジム戦がひかえてるので」
旅は別れもあるし出会いもある。それが今日身にしてみた

デイグダの穴、デイグダ以外にも？

デイグダの穴、デイグダ以外にも？

「ジム戦、ジム戦」

「若いの、ジム戦をするのかい？」

「おばあさんどうかしたの？」

「このジムのジムリーダー、マチスは電気使いで有名でね」

知ってる。けど、こつちにはニドリリーノが控えてますから。進化させるのは確か…。つきのいしだよな。を与えてやれば進化するんだよな。うん、初代なら覚えてる。よし、大丈夫だな。ゴローンとかどうしよう、あいつ通信交換で進化するポケモンじゃん

「そう簡単に突破できる相手じゃないよ。中でもライチュウは強敵だね」

ライチュウかあ、記事で見たけどでんきだま持ったピカチュウの方が強いとか、ピカ様神って訳だ。でもしゅ、種族値？は、ライチュウの方が高いんだよな。でもこの世界では種族値とか、努力値は関係ない。戦い方に全てが決まる

「デイグダの穴に行くといい、あそこでデイグダを捕まえて育てればマチスに勝てるじゃろう。ああ、じゃが強いデイグダやダグトリオもいるようじゃぞ？」

「情報提供ありがとうございます。どうする？サトシ」

「せっかくだしデイグダの穴に行くか。こいつの完成にも捕まえるのは必要なコトだし」

「こいつって…ポケモン図鑑？」

「そう、相手を確認するコトでデータがインプットされるハイテク図鑑って訳だ。さあ、行こう。デイグダの穴へ」

「あ、ちよつと待ってよ。場所どこか分かるの？」

「道行く人に聞けば分かるさ」

「他人任せ…」

「すみません、デイグダの穴ってどこ

ですか？」

「ん？旅の方か？デイグダの穴ねえ…」

ん？何か渋ってるぞ、何かあったのか？

「やめといた方がいい。今のあそこは、荒地だ」

「どういうコトですか？」

カスミが訊く。俺も訊こうとしてたコトだ

「暴れ回るポケモンがいるそうさ。当分あの穴には入れない。だからニビシテイに行けない」

別にニビシテイに行きたい訳じゃないんだが、でも困ったな。入れない…ん？

「入れない…なんてコトはないんですか？」

「うん？そうだね、通行止めとかにはなってるよ」

よし決まり。じゃあその荒れくれポケモンを退治しに行こうじゃないか。んでデイグダとその進化ポケモン、名前忘れたけど、確か3つ子だったはず。よく足は？とかでネタにされてたやつ

「行くの!?!私は反対よ!?!」

「じゃあポケモンセンターで待つてな」

「… ああ！もう！あいつには振り回されてばかり！… でも嫌っ

て気持ちでもない…か」

道をしっかりと訊き、デイグダの穴の前までやってきた

「あれ？カスミ、ポケセンで待ってるんじゃない？」

「アンタが心配なのよ。ほら、行くわよ」

「ありやいや、仕切られてる。まあいいか」

「ライト、ライト、あつた」

カチつとボタンを押してライトをつける。光はデイグダを見つけ、ポケモン図鑑にも登録される。そのまま進化系も見つかればいいな

「地震？」

「…違うわ、これはポケモンが起こした物よ」

「なにせよ、ここで何か起こってるってコトだな。どこにそのポケモンちゃんはあるのかな？」

「ふう、疲れた」

岩に座る。水を飲んで休んでるところ

「サトシ…アンタ…座ってるの」

「岩がどうした？」

「サイホーン！」

蹴飛ばされた。馬に蹴られて死ぬとはこのコトか、馬じゃないな

「図鑑、図鑑！」

『サイホーン、とげとげポケモン タイプじめんいわ たかさ1.0 m おもさ115.0 kg

あたまは わるいが ちからが つよく こうそうビルも たいあたりで コナゴナに ふんさいする。』

「高層ビルもたいあたりで粉々って…そんなのに座ってたのか」

「サイ！」

「何か言ってるわよ？」

「サイサイ！サイサイサイ！」

「なるほど」

頷く

「分かるの？」

「サツパリ」

ずっとこけた。なんだ？それにしても

「こんなところにサイホーンか、捕まえてやる。珍しいポケモンだからな」

「サイホーンを捕まえるのかえ？」

「さっきのおばあさん!？」

「そのコは私が逃がしたポケモンじゃよ」

「え？なんでそんなコトを？」

「強いトレーナーに使ってほしくてな。サイホーンもそれを望んでる」

「サイホーン…それでいいのか？」

「…サイ」

頷くサイホーン、なら

「いいぜ！こつちが勝ったら俺の仲間になってくれよ！」

「サイ！」

「行け！ヒトカゲ！」

「相性最悪じゃない!？」

「ヒトカゲ！メタルクロー！」

「カゲ！」

図鑑にはメタルクローが表示されている。これなら少しはダメージをあたえられるはず

「サイ！サイ！」

「みだれづきか、なら、ほのおのうず！」

サイホーンを囲ってほのおのうずが、サイホーンの動きを止める…と、思っていたが

「サイイイイ！」

「そのままとっしん!？ヒトカゲ！」

指示を出すのが遅れ、避けるのに間に合わず、ヒトカゲはとっしんをくらってしまう

「カゲ〜!？」

「そのまま捕まえとけ！ほのおのパンチ！」

殴るが、硬い体にダメージは入らない。だが

「やけどはするだろう?」

そう、状態異常、これは捕獲に対して1番必要なファクター、今なら

「行け! モンスターボール!」

「サイ!?!」

捕まれ! 捕まれ!

カチツと捕まった音が鳴る。

「... やった... やったぞー!」

「カゲ!」

「ほんとに捕まえた...」

「強いトレーナーじゃ... サイホーンも喜ぶじやろう」

「それじゃ、デイグダの進化系も見つけて今日は終わりにしよう。明日はジム戦だ!」

新たにサイホーンが仲間になった
たまご

ヒトカゲLv20

ひのこ メタルクロー ほのおのうず ほのおのパンチ

オニスズメLv26

オウムがえし つばめがえし おいうち にらみつける

スピアーLv24

ダブルニードル ベノムシヨック きあいだめ いかり

ニドリーノLv25

つつく にどげり どくばり つのでつく

サイホーン25

とっしん みだれづき じならし なしくずし

V Sライチュウ

「さて、今日はジム戦だな。みんな、熱とかないよな？」

「カゲ！」

「サイ！」

「スピ！」

「クエ！」

「ニド！」

最初から順にヒトカゲ、サイホーン、スピアー、オニスズメ、ニドリリーの順だ

「今回はニドリリーとサイホーンに出てもらおうと思ってる。その前に」

バックからつきのいしを取り出して

「ニドリリー、これ。」

「ニド?…ニド!?!」

進化が始まった。ニドリリーはニドキングに進化した

「ニドオオオオオオオオオオ!!」

朝からうるさいけど、ニドリリー…いや、ニドキングか、は嬉しいのだろう

「ニドキングにはじめん技がないから必然的に最後がサイホーンになる。いいな?」

みんなが頷く。ヒトカゲ、1度もジム戦に出してやれてないな。いつか出してやらないと

「さ、行くか」

そう言った突如、頭を叩かれた

「さ、行くか。じゃないわよ!旅の仲間置いて行く馬鹿がどこにいる!」

痛い…

「私も一緒に行くって言ったでしょ?ほら、行くわよ」

理不尽だあ!

「ジム…改めて見ると貫禄あるなあ」

「私の時はそうでもなかったくせに」

無視して入ろう

「たのもう!」

「oh! ジム戦デスか? いいですよ! マチスが相手になりマース!」

なんだこの人、なんか... 片言というか

「では! ポケモンバトル始めましょう! 互いに使用ポケモンは2体! 交換はチャレンジャーのみOK、OK?」

「お、OK」

やっぱり予想した通りだった。でも3体って言われたらヒトカゲ使うまでだが

「行つてください! コイル!」

コイルか、はがねタイプがついてるやつだから面倒だが

「行け! ニドキング!」

「オーウ! じめんタイプですか! ですが、それぐらいでやられる私のポケモンではありませんよ? きんぞくおん!」

まずい! 避けるほど速い訳でもないし受けるしかないか、いや。方法はある

「ニドキング! 地面に向かってにどげり!」

ニドキングは地面に向かってにどげりを行い、飛び跳ねる

「避けられてしまいましたか、では、ソニックブーム!」

あれは、受けて損傷はないな。なら

「突進してにどげり!」

腕をクロスさせて突進し、ソニックブームを耐えて空中にいるコイルににどげりをかました

「ですがでんきタイプにはかくとうタイプはダメージがないですよ?」

ん? 知らないのか? はがねタイプの存在、ならこっちのもんだ

「まだまだにどげり! 相手の攻撃なんて構うな!」

その声に応じてにどげりをどんどんかまして行きコイルはどうとう戦闘不能になってしまった

「oh... コイル... よく頑張ってくれました。では、次は私の最

大の相棒を出します。ライチュウ！」

「チュウ！」

とうとうラスボスのお出ましか。次は

「どくばり！」

「たたきつける！」

どくばりが辛うじて当たるが、たたきつけるがニドキングに当たる。そして

「ニドキング…よく頑張った。ゆっくり休んでくれ…すう…ふう…行け！サイホーン！」

「サイ！」

「じならし！」

「ワッツ!？」

ライチュウは相当のダメージを食らってるようだ。よし、このまま「じならしを続ける！」

「ライチュウ！止めるのデース！たたきつけるを横に薙ぎ払うように！」

薙ぎ払うなんて言葉知ってるんだ。それはともかく、まあ、ここまですででしたら大丈夫だろう

「チュウ！」

「サイ!?!…サイ！」

サイホーンのとっしんが、ライチュウに炸裂した。それで決着がついた。とっしんの反動は特性のおかげで受けずに済んだ

「why?なぜ、ライチュウの素早さがサイホーンに負けたのです?」「それはじならしの効果ですよ。じならしには受けたポケモンの素早さを下げる効果がある。それを受け続けたらいくら速くてもサイホーンのとっしんのスピードには負けるでしょう」

「完敗デース！これを、オレンジバッジデース！」

「オレンジバッジ！GETだぜ！」

「サイ！」

「ニド！」

「勝っちゃった…ここら辺で負けると思ってたけど、案外あいつ、才

能あるかも」

次は：・ ヤマブキシテイがダメだから、タمامシシテイだな
たまご

ヒトカゲLv20

ひのこ メタルクロー ほのおのうず ほのおのパンチ

オニスズメLv26

オウムがえし つばめがえし おいうち にらみつける

スピアーLv24

ダブルニードル ベノムシヨック きあいだめ いかり

ニドキングLv26

つつく にどげり どくばり つのでつく

サイホーン26

とっしん みだれづき じならし なしくずし

イワヤマトンネル

「なあ、タمامシシティに行くにはどうしたらいいんだ？ ヤマブキシ
テイが通行止めじゃ、行きようが」

「ふふん、ここでこのカスミ様の登場ね」

「やっぱ自分で探すわ」

「あー！ 待って！ ごめん！ 普通に教えるから無視しないで！ ハナダシ
テイの横に道があつたでしょ？」

んー？ そんなのあつたつけ？ 覚えてないや。 とうか横通つてな
いし

「そこから行けるのよ。… シオンタウンにね」

「タمامシシティじゃないのかよ。…」

意味ねえじゃん

「でもでも、地下通路あるし。タمامシシティに行けるわよ？」

ま、いいや。そこしか今のところ道はないみたいだし行くか

「じゃあ戻るまでカット」

「え」

「はい！ イワヤマトンネル到着」

「ここまでトレーナーと戦ったけどね」

「いいじゃないか、その途中でヒトカゲがリザードに進化したんだか
ら」

「リザード！」

うんうん、ポケモンセンターで休んで、1日経ってからイワヤマト
ンネルに挑むか

「さて、行くか」

「また私を置いて行こうとして！」

また来たよ。役にはたつんだけど口うるさいというか

「今口うるさいとか思わなかった？」

「思わなかった」

さあ、入ろう

「うわ、真っ暗だ」

「そうね、天然物だからライトとかないのよ」

「リザード、頼めるか？」

「リザード！」

リザードに先頭を歩いてもらい、俺たちは懐中電灯を照らして先を
進む

「お、イワークだ」

ポツポツ発見！いらん！

「あれ？ここ、さつきも通らなかったか？」

「そう？」

「リザード、回れ右」

右に回り、歩く。そして

「下に続く石段・・・降りるか」

「崩れたりしないわよね？」

「しないだろ、ほら行くぞ」

カスミの手を引き、下へ歩く。リザードはびよんぴよん跳んで降り
ていく

「んー、特にめぼしいポケモンはいないかな」

イシツブテ、ワンリキーと普通に目にするポケモンばかり。珍しい
ポケモンはいないな

「お、宝箱発見」

「貴方、ちよくちよくそれ触ってるわよね」

「落ちてるんだから仕方ないだろ。さーて、何が入ってるかな？」
中身は・・・

「なんだこのモンスターボール？」

「スーパーボールよ、ジムリーダーにのみ配布される特別なボールよ。
他のポケモンより捕まえやすくなってるの」

へえ、ラッキーだな。よし、珍しいポケモンを見つけたらこれ使おう

「でもさ・・・迷ったよな」

「・・・そうね」

どうすれば・・・ そうだ！

「風！」

「風がどうしたのよ？」

「風のする方向を辿って行けば出口に行けるんじゃないか？」

「それもそうね、リザード、風、どっちから出てるか分かる？」

「リザ」

指さす方向は暗闇、しかしこっちの方向は俺たちが通ってない道だ。なら正解だろう

「外だあああああ！」

「うるさい！」

叩かれた。痛い

「ポケセン行くか」

今日の宿はポケセン、偶に野宿するけど

たまご

リザードLv24

ひのこ メタルクロー ほのおのうず ほのおのパンチ

オニスズメLv26

オウムがえし つばめがえし おいうち にらみつける

スピアーLv24

ダブルニードル ベノムシヨック きあいだめ いかり

ニドキングLv26

つつく にどげり どくばり つのでつく

サイホーン26

とっしん みだれづき じならし なしくずし

たまごが孵り、知らないポケモンが

「回復お願いします」

イワヤマトンネルで疲れたポケモンの回復をジョーイさんに頼んでさっさとこの薄気味悪い町から出ようと考えていたら

「ロケット団の奴ら、何を考えてるのかしら?」

「分からない。けど、幽霊を越えて上の階にいるんだから、何か考えてるんだろう」

「あの、すみません。ロケット団って」

「ロケット団を知らないのか?」

「いえ、ロケット団は知ってます。けど、幽霊って」

「幽霊は幽霊さ。何人もの人が幽霊を見ている。シオンタワーは呪われてるんだよ」

・・・そんなコトが、でも

「幽霊って言うからには成仏させる方法があるんですよね?」

「さあ?でも可能性はあるな」

そうか、じゃあ

「カスミ、行こう。シオンタワーに」

「はあ!?!正気!?!幽霊よ!?!幽霊!」

「幽霊でビビってどうするんだよ。それにロケット団をとっちめてボスの居場所を吐かせてやる」

「旅のお方」

「なんですか?」

おばさんに話しかけられた。なんだろう。不思議な雰囲気を出しているが

「まずはタمامシシテイに向かった方がいい。幽霊の件はそれからだよ」

「なんでそんなコト分かるんだよ」

「占いさ」

「...分かった。カスミ、行こう」

「自由奔放すぎよ!」

歩いてポケモンセンターから出る。タママシまではすぐだ。タウ
ンマップを見る限りはな

「お、ガーディ発見。捕まえよう」

サイホーンを出してじならしをさせる。いい具合に減らせたかな
？

「モンスターボール！」

1、2… 出た!? 捕まらなかったか。でもモンスターボールはまだ
いっぱいある。こうなったら数打ちや当たる戦法で捕まるまで投げ
るぞつて逃げた!? も、モンスターボール!

「捕まった…」

「そりゃ、野生なんだから逃げるわよ…」

これはオーキド研究所行きだな。さて、タママシシティに行こう

また地下通路を壊した。いやさ? ゴーストとゴースの群れに出く
わしたんだよ。んでさ? スピアーは狭いし飛べない、オニスズメも同
じ、ニドキングとサイホーンは攻撃技がゴーストタイプに有効じゃな
い。ならリザードしかなくね? で、リザードにかえんほうしや命令し
たわけ。そしたらこの前より爆発した。辛うじて生き残った。カス
ミもこつち側、俺たちはなんとかタママシ側にいることができた
「だからゴースたち相手にほのお技はダメって言ってるでしょ!」
「だって俺の手持ちで有効打がないし…」

密室空間でガスに炎ぶつけたら爆発するわな。それはそうとたま
ごが動いてるんだが

「なあ、このたまご…。」

「ああ、大事そうに持つてるそれね。それがどうしたのよ?」

「動いてる」

「嘘!? 孵化するの!?!」

光り、たまごが割れて中から青と黒が貴重のポケモンが現れた

『はふう…』

「喋った?」

「喋った… わよね」

『マスターはどっち?』

「俺だよ。君を孵化するまで持ち続けたのは」

『マスター、リオルですー! よろしくお願いします』

なにこの子いい子すぎる。カスミとは大違い

「よろしく、リオル」

握手した

リオルLv1

ブレイズキック このゆびとまれ でんこうせっか こらえる

リザードLv24

ひのこ メタルクロー ほのおのうず ほのおのパンチ

オニスズメLv26

オウムがえし つばめがえし おいうち にらみつける

スピアーLv24

ダブルニードル ベノムシヨック きあいだめ いかり

ニドキングLv26

つつく にどげり どくばり つのでつく

サイホーン26

とっしん みだれづき じならし なしくずし

コイン！スロット！チャージ！

「じゃあ別行動な」

「ええ、シヨップピングに時間を割きたいし」

女の子だなあ、男っぽいけど。よし。なにはともあれ腹ごしらえだ。レストランがあると聞いた。トレーナーから巻き上げゲunge
フン

トレーナーから貰ったお金を使いそこに行こう

「いらっしやませ」

席は好きなどころに座っていいのかな？

「ご注文が決まりましたらお呼びください」

「何にしようかな」

「坊主」

「ん？」

おっさんに話しかけられた。なんだろう

「カツアゲですか？」

「違う！これ、貰ってくれんか？」

「これは… コインケース？」

「ああ、持ってたらまたスロットしそうでな。しないためにも手元に
あつたらと思つて捨てようとしてたら坊主に出会つてな。坊主、やつ
てみないか？」

スロット… つまり、景品と交換できるってコトだ。なら

「はい！是非！」

そうと決まったらご飯を頼んど

「スロットかあ、何が景品なんだろうか」

楽しみでワクワクが止まらないぜ！

「ここが、パチンコもどきか」

この世界にパチンコがあるかどうか知らないけどな

「よし！行くか！」

入って色んな人に話しかけたり地面探つたらコインGETした。
これでやろう

「3枚投入」

『マスター、これは破産するのでは?』

「いいのいいの、元々俺のお金で使ってる訳じゃないからいきなりスリーセブン、これは幸先がいい。そして

「リオル、やってみないか?」

『ええ!?じゃ、じゃあ』

リオルを抱っこして、スロットと対面させる

『えい!』

おお、スリーセブン。やるなあ。しかもクロス

「サ・ト・シ?」

首をギギギアルと動かして後ろを見る。そこには鬼がいた

「誰がスロットしろって言ったのよ!!アンタはこのジムのコト調べなさいよ!」

「悪い!悪い!いや、でもほら。こんなに、たんまりと。な?」

「な?じゃないわよ!貴方、いつか破産するわよ」

それ、同じコト言われたな。金遣い荒い方じゃないんだけど、スロットがやれって命令して... 出来心なんです!なんて通用しないよな

「まあまあ、景品と交換しに行こうじゃないか」

と、いう理由で隣の景品交換コーナーへ

「んーと、何がいいかな」

「あ、ポリゴンがいる」

「ポリゴン?」

確か高いポケモンだっけ。ポリゴンショックは知ってるぞ。俺、見たわけじゃないけど有名だしな。なんだって酔うような作画したんだろう。そこまでフラツシユさせなくてもなあ

「ポリゴンお願いします」

「9999枚になります」

うわ、数えんのめんどくせえ。

「えーと、コインケースの一穴が1000だから... 1000... 2000... 3000」

数えると9999超えていた

「じゃああるので交換で」

てーてーてー、てててててて！サトシはポリゴンを手に入れた！
ポリゴンにニックネームをつけますか？

いらん説明が出たな。あとてーてーてーだけじゃわからん

「余った分どうしよう？」

「ちようどストライク交換できるわよ」

ストライクかあ、確かハッサムとかいうかつこいいポケモンに進化
するんだよな。じゃあ

「ストライクで、コインは全部ここに置いていきます」

「…はい、ありますね。はい。ストライクの入ったボールです」

「ありがとうございます。手持ち一新するかね」

「何？変えるの？」

「うん、手持ちはリオル、リザード、ストライク、ポリゴン、サイホー
ン、あと何にしようかな」

「そのカップル」

「か、カップルじゃありません！」

「うむう、そうじやったか。このイーブイを貰ってくれんか？」

「イーブイ??」

「そうじや、3つの進化先がある珍しいポケモンなんじや」

「へえ、貰っていいんですか？」

「そうじや。ロケット団に悪用されていた所をなんとか助け出したは
いいが、儂では守りきれん」

「サトシが2匹貰ったら？私はパス」

「シヤワーズという水ポケモンに進化するんじやが」

「是非！貰います！」

「は、ははは。じゃあ…見返りとか後で何か要求しませんよね？」

「もちろんじや、嘘はつかん」

じゃあ貰おうかな。

「サトシ、みずのいしはダメだけど、ほのおのいしとかみなのいし、
どっちかあげるわ。好きな方使ったら？」

なんと、カスミがくると、でもどこからこれを入手したのだろうか

「シヨップに1つずつ売ってたの。それで珍しいから買っただけ。それだけよ。ほら早く選んで」

「じゃあ...」

リオルLv15

ブレイズキック はっけい でんこうせつか こらえる

リザードLv24

ひのこ メタルクロー ほのおのうず ほのおのパンチ

イーブイLv20

てだすけ スピードスター みきり ほしがる

ストライクLv25

でんこうせつか きあいだめ れんぞくぎり カウンター

ポリゴンLv25

サイケこうせん こうそくいどう じこさいせい テクスチャー

サイホーン26

とっしん みだれづき じならし なしくずし

リオル、鍛える

「はあ、どうにかしてヤマブキシテイに行けないもんかねえ」

「喉か乾いたって言ってたわね」

「今すぐみず買ってくる！」

「熱いのつても言ってたわね」

「…俺が温める」

「気持ち悪いわね」

どうしろって言うんだよ… とりあえず色んなビルに入っていくか

「ここは？」

「おお、若いカップルや」

「カップルじゃありません！」

そこまで強く否定しなくても… さて、何用かな？

「熱いお茶はいらんか？今沸かしたところじゃが」

！閃いた！これを警備員に渡せば警備員は通っていいって言うてくれるに違いない！

「貰います！」

「そうかそうか、ほれ」

熱い！でもこれで警備員に賄賂ゲフンゲフン… これで警備員に媚を売る。よし、行こう

「ここで飲んでいかんのか？」

「外の空気を吸いながら飲みたいもので」

「そうかそうか… 飲まない… なんてコトはないじゃろうな？」

「そ、そんな！俺はただ… はい。飲みます」

現実是非情のようだ

待てよ？何も歩いて通れという訳じゃない。飛んで行けばいいんじゃない？

「よっしやあー！」

「きやあ!?!何よ!?!」

「いや、よし。リオル！特訓だ！」

『特訓ですか?』

「そうそう、お前を強くするためのな、そのためにもオーキド博士からポケモンを送ってもらわなければならない」

という理由でポケモンセンターに

「なるほど、そのリオルというポケモン、見せてもらえんか?」

「リオル、こつち」

『?』

よいつしよ、と

「はい。見えますか?」

「おお!これはルカリオの進化前じゃな」

「ルカリオ?」

「古来より伝わる波動を操るポケモンじゃよ。さて、鍛えるのじゃな。本来なら6匹以上は持てないのじゃが。ボールにしまっただけじゃ大丈夫じゃろう。1匹目じゃ」

オニスズメを送ってもらう

「オニスズメ」

「クエー!」

「次は… スピアーか」

「スピ!」

次は何かな?

「ニドキングか」

「ニド!」

「次はニドリーナか、進化したんだな。じゃあつきのいし使ってやるか」

外に出て、7番道路に出て特訓をする

「よーし、じゃあスピアーの攻撃を避けるんだ。」

『あの槍のような物をですか!?!』

「そうだ。頑張れよ」

「スピ!」

『うわあ!危ない…!』

リオルのいた所には穴が、それだけスピアーの腕の力は強いという

コトだ

「鬼ね」

「スピ、スピ、スピ」

『タンマ、タンマ!』

「止まってたら射抜かれるぞー」

『マスターは殺す気ですか!?!』

「レベルあげるためにはこういう特訓も必要だろ。ほら、ブレイズキックして返す」

『~~~~この!』

ブレイズキックがスピアーを捉えて蹴った。炎の蹴りはスピアーに効果抜群で、倒れるまでのダメージを与えた

「スピー…」

「スピアー、ボールに戻っててくれ。特訓、付き合ってくれてありがとう
な」

ボールに戻しすぐにオーキド博士のところに転送する

『はあ!はあ!』

「次はニドクイン&ニドキング!」

『2体同時だなんて反則じゃないですか!?!』

「ロケット団相手だとそうは言ってられない。ほら、やったやった」

『はっけい!』

リオルのはっけいが、ニドキングを捉えた。急所に当たったのか、かなり辛そうだ

「だけど」

『あれ…なんか…目眩が』

「特性、どくのトゲだな。リオル、一旦中断。回復するから」

そう言っバグからどくけしとキズぐすりを取り出してリオルにかけてやる

『マスター、ありがとうございます!』

うん、いい子だ。よし、続き行か

「ニドキングも回復が必要か?」

「ニド!ニド!」

いらないと首を振る。そうか

「ポケモン図鑑見る限りはリオルのレベルは急速に上がってるけど・・・」

そう、ポケモン図鑑にはレベルを表示する機能がついている。更には技表示まで、これならどんな技を覚えてるか分かる。

『はっ！せい！』

ブレイズキックを駆使してリオルは攻撃を避けていく

「はい、そこまで。じゃあ次はオニスズメ、行ってみよう」

『タイプ相性最悪!?!』

「苦手タイプも耐えるのが強み、ほら頑張つて。行くぞ。つばめがえしー!」

『~~~~!!?』

クルツと一回転し、オニスズメはリオル目掛けて飛んでいく。それをリオルは

『これなら攻撃できないだろ!』

乗ることで回避した。かくとうタイプならではの身軽さだな

「リオル!そのままはっけい!」

『ハアっ!』

リオルが乗っているオニスズメにはっけいを繰り返すとオニスズメは地面に落ちた

『ブレイズキック「ストップ!」っ!?!』

「それ以上やる必要ないだろ?オニスズメ、ありがとな。ちよつとお前には無理があつたか?」

「クエ・・・」

『すみません・・・と、言ってます』

・・・そうか、リオルはポケモンだからポケモンの言葉が分かるのか「そんなコトないよ。ありがとう。それじゃあボールに戻って休んでくれ」

ボールに戻すとポケモン図鑑を通してオーキド博士のところへ転送される

「じゃあ、今日はこれぐらいにするか。明日、ジム戦するぞ!」

『おお!』

「リザード!」

「□▷△○#?」

「ストライク!」

「ブイ!」

「サイ!」

「いい返事... 1匹変なのいなかったか!」

リオルLv23

ブレイズキック はっけい でんこうせつか こらえる

リザードLv24

ひのこ メタルクロー ほのおのうず ほのおのパンチ

イーブイLv20

てだすけ スピードスター みきり ほしがる

ストライクLv25

でんこうせつか きあいだめ れんぞくぎり カウンター

ポリゴンLv25

サイケこうせん こうそくいどう じこさいせい テクスチャー

サイホーン26

とっしん みだれづき じならし なしくずし

タママシジム。脅威のくさタイプ。

「たのもー!」

「だからその物言いどうにかならないの?」

いいだろう、道場破りみたいで楽しいし

「あらあら、これはこれは…ハナダジムのジムリーダーも一緒に」

ドキツとした。あまりにも美しいという言葉が似合ってる人だから

「タママシテイ、ジムリーダーエリカです。では、対戦ですね? いいですよ。今なら私のポケモンもコンディションは完璧なので」

へえ、言うねえ。俺のポケモンも負けないぞ

「使用ポケモンは3体、入れ替えはチャレンジャーのみ可能、これどうですか?」

「いいですよ。」

「では…行ってくださいモンジャラー!」

「行け!リザード!」

「つるのムチ!」

「ひのこで焼き払え!」

つるが飛んでくるがひのこがそれを焼き尽くす。が

「っ!」

1本残っていた

「予め、1本遅く飛んでいくように命令していたのですよ」

そんな、でも

「なら、それも焼き払うだけだ!」

「?まさか自分にひのこを?」

「いいや、ほのおのパンチ!」

ほのおのパンチが捕まった腕のつるを焼き払いリザードは接近する

「まあまあ、ではあやしいひかり」

っ?!まずい、これを受けたらこんらんする!!

「避ける!リザード!」

「リザーアアア…ド！」

ゴロゴロと転がるように、いや。転がっているな。転がってなんとか躲したようだ

「あらまあ、これも避けますか」

「ひのこー！」

「つるのムチ」

くっ！これじゃあジリ貧だ！なら

「ほのおのうず！」

「っ！」

「走れ！リザード！相手に位置を悟られるな！」

走るリザード、それを

「モンジャラ、5時の方向にリザードがいます」

「ひのこー！」

…よし！当たった！ほのおのうずは解けて動けるようになった

モンジャラ

「まさかつるで耐えたのか!？」

「身動きがとれないという訳ではないので」

うふふと笑いながら言うジムリーダー、エリカ。勝てないかもしれない。でも、勝つために来たんだ。弱気になってどうする！

「近づいてほのおのパンチ！」

「無駄ですよ。ギガドレイン」

「リザ…ド…！」

パンチが辛うじて当たる。が、それでも

「嘘だろ!?!リザードが…くさ技で戦闘不能!？」

「あらあら、相打ちですか。では次ですね」

「ありがとう、リザード。初陣が相打ちで悪いな。頑張ってくれたよ。休んでくれ」

ボールに戻して次に行く

「行け！ストライク！」

「ストライク！」

「今度は虫ですか、定石通りですね。では、マダツボミ。行ってください」

い」

「マダツボミだと？巫山戯てるのか？」

「れんぞくぎり！」

「受け止めてください。マダツボミ」

「なっ!?白刃取り!?嘘だろ!?あんな柔らかかそうな腕して!？」

「投げ飛ばしてください」

「ストライク！飛べ！」

「ストライク……」

「どうしたら…… どうしたら！っ！そうだ！

「かげぶんしん！」

「え!?そんなわざ覚えてないんじや」

「……！ストライク！」

「これは!？」

そう、擬似的かげぶんしんだ。今のストライクはかげぶんしんを覚えていない。だけどその速さでまるで分身がいるかのように見えるようにする

「今だ！れんぞくぎり！」

「マダツボミ！後ろです！」

だが遅い。れんぞくぎりが当たる。さっきもれんぞくぎりを放つたから威力は上がっている

「そのままもう片方でれんぞくぎり！」

「受け止めて「遅い！」っ！」

当たる。言ってる最中に当たる。マダツボミは受けて怯む

「そのまま「たたきつける！」っ！離れろ！ストライク！」

だが、つるがそうはさせなかった。マダツボミから伸びたつるが、ストライクの足を絡め取り逃がさないようにひっぱりたたきつけた…… 体力は少ない。ならするコトは1つ

「カウンター！」

「マダツボミ！」

ストライクのカウンターが当たり戦闘不能になるマダツボミ

「マダツボミ…… よく頑張りました。休んでください。では最後の1

匹ですな」

ゴクリと喉を鳴らす。どんなポケモンを出すのだろうか。マダツボミはここまで来る道中見かけたから弱いポケモンだろうと思ってたが使い方次第で強くなると知った。次は

「行つてください。ウツボット！」

ウツボット!?! 見かけがマダツボミに似てるからマダツボミの進化系か? ポケモン図鑑を開いて確認するとそうだとでている

「れんぞくぎり！」

「ようかいえき」

どく技... しかも戦闘不能に...

「ありがとう、いい活躍してくれたよ。休んでくれ。」

「貴方も次が最後の1匹ですな」

「ああ... 頼むぞ。行け! リオル！」

『マスターのために!』

「リオル? 訊いたコトのないポケモンですな」

「ブレイズキック！」

油断している間に攻撃だ!

「つるのムチ」

なっ!、ほのおの足ごと掴んで... それほどレベルが高いのか!?

「リオルウウウウ！」

『マスター! はっけい!』

リオルがつるにはっけいを繰り出してなんとか逃げ出すが、次捕まったら終わりだ。

「慎重に... 走れ! リオル！」

「ようかいえき」

走って避けるリオル。

「でんこうせっか！」

「捉えてください。ウツボット」

ブレイズキックさえ当たれば倒せるのに! 今のは迂闊だったか!

「では、最後です。ようかいえき」

「こらえるだ! リオル！」

『ぐうぐうぐうぐう!!』

ダメか… もう勝ち目は… ない

『マスター！僕は諦めてない！まだ勝てる！だからマスターも諦めないでー』

「リオル… そうだよな。お前が諦めてないのに、俺が諦めてどうするんだよ。」

帽子のつばを後ろに向けて被り直す

「行くぞ！リオル！俺たちの本気、見せてやろうぜ！」

『うん！』

その時、光が生じた

「まさか!？」

「進化!？」

「このタイミングで!？」

『うおおおおお!!はっけい!!』

俺の下に戻ってきたリオル… ルカリオ

「ルカリオ… でいいんだな？」

『はい。マスター、行きましょう。勝ちに』

「飛び上がれ！」

ジャンプするルカリオ

「ようかいえき！」

ルカリオにようかいえきが当たるが効かない。はがねタイプにどくは効かないからだ。ルカリオにはリオルの頃と違ってはがねタイプが追加されているから

「トドメのブレイズキック！」

ライダーキックと言わんばかりの急降下キックはウツボットに大ダメージを与えて戦闘不能に

「まいりました。貴方にこれをレインボーバッジです」

「レインボーバッジ、GETだぜ！」

『はい!』

「リザード！」

「ストライク！」

「ありがとう、いい勉強になったよ。弱いポケモンなんていないってね」

「それはそれは、では私はこれで」

「ああ、カスミ。行くぞ」

「ちよつと待つてよ!」

ルカリオLv26

ブレイズキツク はっけい ボーンラッシュ コらえる

リザードLv28

ひのこ メタルクロー ほのおのうず ほのおのパンチ

イーブイLv20

てだすけ スピードスター みきり ほしがる

ストライクLv27

でんこうせっか きあいだめ れんぞくぎり カウンター

ポリゴンLv25

サイケこうせん こうそくいどう じこさいせい テクスチャー

サイホーン26

とっしん みだれづき じならし なしくずし